

第8期第2回府中市美術館運営協議会報告書

日時 平成27年7月19日(日) 午後2時～4時15分

場所 府中市美術館会議室

出席者 委員(順不同・敬称略)

薩摩雅登、谷矢哲夫、中村一哉、大杉健、西郷美絵、米谷一志、
隠岐由紀子、吉田裕子、清水正人、金津道子、佐藤静夫

事務局

藪野館長、須恵副館長、堀管理係長、志賀学芸係長、
武居教育普及担当主査、原田事務職員

傍聴者 なし

内容

- 1 開会
- 2 府中市美術館運営協議会会長挨拶
- 3 府中市美術館館長挨拶
- 4 議題
(1)平成26年度及び平成27年度美術館の事業と運営について
事務局より資料に沿って説明

資料についての質疑応答

Q 美術購入費の予算が平成27年度から付いたが目的あつての予算なのか、それともとりあえずの数字なのか。

A 例年、作品購入費については予算要求をしていましたが、平成27年度については府中市ゆかりの作品を購入するということで予算要求が通りました。地域美術が実施している「わんこ募金」によって購入した作品の寄贈を受けており、そのことが新聞に掲載されました。美術館の作品購入の重要性が、受け入れられたのだと考えられます。

Q 美術購入費は翌年度には持ち越せないのか。

A そのとおりです。

- Q 「美術館整備事業費」は執行がないが、これはどういう目的の予算なのか。
- A 突然設備が故障した時など、緊急の工事のための予備費のようなものです。これまでは緊急工事が必要な状況にはならなかったため、執行しておりません。
- Q 資料2「歳出に対する歳入の割合」が2割にも満たない。不足している分は市税で補っているということだろうが、そのことで議会から指摘を受けることはないのか。25年度から26年度決算では増加しているが、27年度予算で低下しているが大丈夫なのか。
- A 歳入歳出については、例年議会でも問われるところではあります。平成26年度はミレー展による入館者の増加や、小山田二郎展の図録増刷などもあり、歳入が増えましたが、平成27年度当初予算では平成26年度よりも少なくなっております。
- Q 議会から具体的な努力目標を示されているのか。
- A 議会等から具体的な目標値を指示されてはおりませんが、当館としては20%を目標としています。
- Q 外国の美術館では、作品購入のための友の会などの基金があるが、府中市美術館では実施しないのか。
- A 賛助会員を設け、歳入を増やす努力を行っております。
- Q 賛助会員はいつからあるのか。
- A 平成26年11月からです。
- Q 資料1の2教育普及事業の「実習・研修」は、具体的に何を行っているのか。
- A 教員研修については、決まったメニューを用意して参加してもらうというより、それぞれの希望に応じて変更しています。主には美術館との連携や、鑑賞教育をどのように進めていくかという内容が中心になります。
- Q 学芸員や大学の学芸員課程との連携した実習はしているのか。
- A 大学との連携をおこなっており、2大学からそれぞれ1日ずつ、見学の形で実習の受入を行っています。
- Q 博物館実習の受入をしてほしいという要望はないのか。
- A 博物館実習は多くの大学から要望があり、例年10数名ずつ受入をおこなっています。その他単発で見学をしたいという要望があり、受け入れているものもございます。
- Q 実習の受け入れ人数が少ないのではないのか。
- A 学芸員資格取得のための博物館実習は、8日間当館学芸員がつきっきりで講義を行っております。館によっては大人数受け入れているところもありますが、しっかり研修をして送り出したいというのが当館での考え方ですので、受け入れ人数は現状より増やす予定はございません。ただ1日・半日の見学については、要望があれば積極的に受け入れていきたいと考えております。

Q ギャラリートークの内容は、学芸員が市民相手に行うものなのか。

A 資料1にあるギャラリートークは「中学生のためのギャラリートーク」であり、市内中学校教員が中学生対象に作品解説を行うものです。これ以外に企画展ごとに開催される作品説明会もあり、企画展イベントに含まれています。

企画展に関しては講演会を盛んに行っており、教育普及事業となっておりますが、展覧会の担当学芸員が講座室を使って行うものです。

Q 会場でやるわけではないのか。

A 会場は込み合うので、最近は講座室を使って行うものが主流です。

Q 資料からだとも年間2回しかしていない印象を受けるので、実施しているなら資料の表記方法について改めたほうがよい。この資料では分かりにくい。

A 展覧会については講演会を複数回設けており、講座室を使用しております。会場のスペースの問題もありますし、会場内での解説を騒音と感じる利用者の方もいるため、説明は講座室にてスライドを利用し、しっかり解説をしております。チケットの半券をもっていれば、再入場できるようにしていますので、ほぼギャラリートークのような形になるのではないかと思います。表記については今後改めてまいります。

Q 展示室内では行っていないが、年間49回は行っているということか。

A そのとおりです。ただし、小学生の鑑賞教室は展示室内で行っています。まずは講座室にて、どのように鑑賞するのか、会場内ではどう振舞うのかを説明してから、展示室に向かうようにしております。鑑賞教室については、引率の先生方のご指導もあり、概ね静かに鑑賞していただいております。

Q 美術館の中が静かでなければならぬ、ということは無いのではないかと。静かであることが良い事だとは思わないが

A 現在の企画展は、展示室内もとても賑やかです。展覧会にもよるとおもいます。

A(委員から) 鑑賞教室のときにあえて来館してみたことがある。子どもの反応を楽しみにしていたが、やはり作品を目の前にした子ども達から「すごい」「きれい」という歓声が出る。それを他の来館者がどう感じているのかも見ていたが、夢中になっている人にはまったく気にしていないようだったが、迷惑そうな表情をしている方もいた。

Q 事前に「こうしてはいけない」と指導しているようだけれども、それ以前に美術の授業で、美術館のルールについて生徒自身が考える授業を行うべきではないのか。

A(委員から) 事前学習についてはすでに実施しています。これまでの教育ではネガティブな「作品を触ってはいけない」「大きな声をだしてはいけない」というアプローチの指導でしたが、最近は「小さな声で喋りましょう」「触らずに言葉で表現してみよう」というアプローチに変わっています。子どもたち全般の

反応としては、鑑賞教室を楽しみにしていて、終わった後は家の人とまた来たい、というのが大きな意見です。子どもたちは楽しいことがあると家庭で「こういうことがあってね」と話をします。それを聞いた親が「じゃあ今度一緒に行ってみようか」と家族で来館して、子どもが鑑賞教室で学芸員から聞いたことを自分の知っている知識として親に伝え、より豊かになっていくというサイクルが少しずつでも生まれていけばと思っています。子どもたちは学芸員の話聞くだけでなく、そのあと友達と見たり、一人でじっくりみたりする時間も楽しみにしているようです。

Q 学芸も事前授業があることは知っているのか。

A むしろ事前授業をするように依頼しており、連携は取っています。

A(委員より) 美術鑑賞については美術館側から『美術鑑賞の手引き』を作成してもらっているので、それに沿った事前学習を行っています。学校としては「美術鑑賞」とすると同時に「校外学習」でもあります。周囲の人たちを気遣う、公共のマナーを学ぶ機会でもあるので、いろんな見方があるというもの分かりませんが、他人を思いやる授業でもあるので理解はしていただきたいと思います。

Q 資料1の教育普及事業は資料3の予算科目としてはどこに該当するのか。

A 概ね美術普及事業費ですが、企画展に係るものについては展覧会事業費・所蔵品展示管理費から支出しております。

(2)「新しい時代の美術館運営」について

以下、 は各委員の発言、 は事務局

SNSに関して。

小中学生でもSNSを利用している。動物絵画の250年展に自分の子どもと見に行ったが、企画展の出口のワークショップにとっても喜んでいて、そのことを自分のSNSで発信したところ、それを見た友人が何人か来てくれた。

親が子どもを連れて行って、お徳感があれば、親がSNSで発信をして、親の間で広がっていくのではないかと思う。

都立の美術館では館のフェイスブックをもっていて、そこに「いいね」をすると展覧会情報がカラーで送られてきたりするが、府中市美術館には無い。

府中市のメール配信サービスに登録しているので、防災などの情報が入ってくるのと同じように、企画展などの情報が入ってくるが、全部文字のみで、自分でホームページを見に行かないと画像データを見ることができない。カラー写真の入った宣伝のようなものが気軽に入ってくる状況にあれば、より府中市美術館の内容が分かるのではないかと思う。

ばれたんのリゾートブックも読んだが、実際に作ったものを撮影して「こんなことをやりました」とSNSに載せれば、さらに集客できるのではないかと思う。

ホームページの運営についてはどのくらいの費用をかけているのか。

ホームページの管理は難しく、不正アクセスなどを警戒しなければならない時代になっている。簡単に良い宣伝が得られる、画像が得られるというメリットもあるが、ホームページ管理費用はどこに計上されているのか。

当館のホームページは、府中市のホームページの中に属しております。府中市のホームページは色使いや文字の大きさ、画像の音声説明などに規定があり、その規定の中で作成しております。全庁的な一元管理になっており、作成に際しては業者を介するのではなく、市の職員がそれぞれ入力しております。ホームページデザイナー等とは契約しておらず、美術館での費用負担は発生しておりません。

見るに耐えないようなデザインだ。どうみても美術館のホームページではない。理由は分かったが、来館しようという意欲のわからないページだ。府中市美術館のホームページはもっとおもしろくするべきだと思う。

また、歳入の増加を考えると、喫茶店とショップが問題。現在のものでは購買意欲が沸かないので、もっと考えて欲しい。利益を得ることを考え、広く綺麗なものに改修して「美術館のレストラン」「美術館の店」らしくしてほしい。

昨年度は図録が売れたことによる収入増ということだが、これが収入源に大きな影響があるはず。収入を増やす方策をより積極的に考えて欲しい。

どこの美術館でもカフェとショップについては色々と悩みどころではあるが、これに関しては公立と私立では全然違う。海外の美術館は非常に良いセンスをもっているのだから、何らかのノウハウはあると思う。

動物絵画の250年展の際、朝日新聞に記事が取り上げられていた。その直後に来館したらとても混んでいたのだから、新聞で取り上げられる事は影響力が強いのだと思った。あれは、美術館からお願いしたものなのか、朝日新聞から積極的に話が合ったものなのか。

これは広報プレスによるものか口頭か。

朝日新聞の一般記事で取り上げていただきました。新聞社には展覧会チラシを送付しております。この展覧会は聖教新聞などにも取り上げられ、これまで当館を知らなかったという新規来館者も増えました。当館が展覧会広報の中で大切にしているのは、プレスリリースなどを各新聞社や出版社等にお送りすることです。できるだけ早期に実施して、メディアで取り上げていただく機会を増やそうと、まず紙媒体で行っております。それをご覧になった記者の方から取材していただき、開催期間中に掲載という形になります。テレビ放送は効果が大きいので、NHKの日曜美術館には図録ができ次第発送しております。取り上げて

いただけるかどうかは、先方の都合次第ということになります。

プレスリリースだけでなく、積極的に新聞者の記者の方々と直接話したいとも思っております。それもまた効果的と考えております。

それはきめ細やかにやっていった方が良いと思う。広報宣伝はこちらがお金をかけてするものだが、報道になるとお金がかからないのと、いわゆるコマーシャルよりも効果がある。NHKの朝のニュースで取り上げられたことがあるが、とても効果があった。

私はテレビ局の現場で仕事をしている。現場視点で言うと、情報の細かさは必要だが、掴むものが必要。今開催中の子ども向け展覧会でも、掴むものがない。ただ単に出ているだけ。これが「美術館として今まで十何年やっていて、初めてやりました、それで子どもが喜んでいます」というようなものがあれば、テレビ局からの取材も来ると思う。特に朝の番組は話題が少ないので、すぐに取材に来るのではないか。

サッカーの澤選手がワールドカップに出場したとき、出身小学校でなにかイベントをやるのか、という問合せが、テレビ局から3局もあった。同じように武蔵野美術大学で黑板アートをやったときも、小学校でも協力していたので、そのことに関して取材をさせて欲しい、という問合せがやはり3局からあった。なにか一つあると全部がまとめて同じ動きをする。その時に、ウケを狙ってもしかたがないと思うが、言葉として魅せられるものがあると、まとめてとびついてくるといふのがあるのかもしれない。

朝日新聞の記事を書いた記者とは個人的にも知り合いです。作品について、「全身が総毛立っているかのようだ」という、不思議な表現がありました。作品を見ていた小学生が、見ていたら本当に毛が立っちゃった、という話をしましたら興味を持ってくれたという事もありました。ある意味で中心になるような物があるというのは大きいと思います。

朝日新聞で書いた記者は、学芸専門の者だったのだと思う。専門以外にも地域にいる記者がおり、二つの記者がいる。専門記者はどこの新聞社でも2、3人程度。専門記者が、何を書くかという、やはり良い企画。質の高くて、美術史の中でも取り上げなければいけないものを企画すると必ず書いてくれる。もう一つは何かおもしろい、とか、ひっかけるような企画。地域の記者も興味をもって記事にしてもらえと思う。本質的には美術記者にいい情報を与えて、展覧会を周知し、美術館は良い展覧会をやるのが大事。府中市美術館は結構良い展覧会ができるので、こういう展覧会を続けていけばよいと思う。また、メールやプレスリリースも良いが、やはり一番いいのは記者との関係を築くことだと思う。つきあいがあるとよく理解してもらえし、そういう記者をつかまえ、関係を築くことが大事だと考える。読売の展覧会をたくさん手がけてきたが、同じ読売新

聞でも、つまらない展覧会だと記事にはしてもらえない。記者には「身内だから書いたと思われては恥」という性質があるので、本当に良い展覧会でないと記事にしてもらえない。美術記者はかたくなな者も多いので、そういった人々の心をどこまで掴むのかは、展覧会を成功させる学芸員の一つのやり方かと思います。

読売の展覧会を朝日新聞の社会部が記事にした例もありました。

垣根なく面白ければ書くということ。

やはり企画の質と、それからもうひとつ、広報のタイミングも直前でなく、ずっと前から「こういうことします」というアナウンスをすることが必要かと考えます。

先ほどの「引き」みたいなものがあって、という話があったが、同じ江戸絵画展でも、「かわいい」という言葉が付いているものと「19世紀」という美術史的な言葉が付いているもので、集客数にかなり差がある。展覧会の名称、キャッチフレーズがすごく大切ではないかと思う。

今日、ぱれたんの展覧会を見たが、よく考えられている。看士も適宜配置されていて、親切に導入をしてもらえた。ただ、子どもたちを飽きさせないようにしようとしているからか、おもしろい作品がたくさん選ばれて展示してあるのに、作品を見ることが置き忘れられて、その前になにか作らせたりする方へ導入するのがありすぎる気がした。せっかく選んでいる作品を、子どもたちにも見てもらいたいと思う。

イージーなキャッチフレーズで呼んでおいて、けれど中は美術館としてちゃんと見せる。府中市美術館は子どもたちが興味をもちそうな作品が選んであるので、それでも良いのではないかと思う。

府中市美術館はときどき、もりだくさんというかサービス過剰と感じるときもある。これもひとつの個性ではあるが。

美術館とは、学校や病院と同じで、「あるかないか」ではなく「なくてはならないもの」だと思う。それはつまり利用する市民が、なくてはならないものだという気持ちで一生懸命応援することが何より、この美術館をよくすることだと思う。抽象的な言い方になるが、このまちにこの美術館がなじんでいるということと、私たちの暮らしと直接、密接につながっているということ、それぞれの市民が誇りに思っているということが、この美術館の先を明るくすることだと思う。

他の自治体で、「美術館はいらない」といった議員がいたが。

そういうことを言わせるような美術館になってはいけないと思う。積極的に市民が利用するようにしていけないといけない。

先ほどのキャッチフレーズのご指摘につきまして、「かわいい」人気というのが非常に、異様なほどに予想外の人数を集客しました。「かわいい」ブームが

世間にあり、それでヒットしたところがあるのだと思います。ネーミングの強さというのは非常に実感しております。当館で評判になりました「ポール・デルヴォー」展において、「夢にデルヴォー」というタイトルで広告したところ、意表をつくようなタイトルが非常に好評でした。

また、先ほどご意見いただきました地域美術館としてのメリハリについてです。現在当館では、一般層については秋の展覧会。夏の展覧会は子ども向け、という位置づけになっており、今回の展覧会も作品の展示位置が子どもの目線に合わせてとても低くなっております。もうしわけないことだとは思っているのですが、当館の限られた展覧会回数の中では、メリハリをきかせながら、多彩な層で「ぱれたんなら行こう」というような層も作っておく必要があると考えております。それと同時に、常設展はしっかり展示していきたいと思っております。中庸的なものではなくて特徴をはっきりと出していきつつ、各層にむけてアピールしていきたいと思っております。

ローランサンは女性の好きな作品だと思うので、ルミエールや生涯学習センターなどにたくさんポスターを貼ってもらい、女性の方に来ていただいたらよいのではないかと。

府中の森芸術劇場の友の会に配布されている広報誌に、チラシの挟み込みを行う予定です。府中近隣の音楽ファンにもローランサンの広報ができると思います。また、中央図書館はたくさんの方がいますので、なにか協力してもらえないか交渉していく予定であります。

実際にぱれたん展は盛りだくさんです。けれど、これは修学旅行のようなもので、そこにまず行って、後で「また行ってみたいな」と思うきっかけになればと期待してのものです。確かに色々な問題点がありますので、それはこれから学芸の中で話し合い、活かして生きたいと思っております。

今回の企画展は、実をいうとあまり期待していなかったが、こんなに美術作品がちゃんと並んでいる、古いのも新しいのも日本のも外国のもという感じで選ばれている。選ぶのも大変だろうが、子どもの読めるような字で1枚ずつ解説がついているのにも感心した。せっかくなので子ども相手にグループを作って引率し、作品解説を行う小規模なものがあると良いと思った。作品への導入が文字でなく音声でおこなわれればいいかな、と。

それがサービスですよ

修学旅行で聞いた住職の話が後々まで印象に残るということがあるから、そういう体験が美術館でもできれば。私はフランス美術専門なので、フランスの美術館が基準になってしまうが、フランスの美術館では幼稚園用・小学校用と解説者を養成している。ボランティアだと思うが。例えば幼稚園生の団体を仏像の前に座らせて、解説を行っている。しかも、解説はそれなりのレベルで行ってい

る。絵の前に子どもたちを座らせ、それでも学生のレベルで解説するというところを行っているので、子どもたちもとても考えながら見ているようだ。

鑑賞キットみたいなものもある。

クイズに答えるというようなものもある。子どもたちがプレートを持って「この中で好きな作品はどれか」という問題に答えたりするものだと思うが、それでもすごく面白がって参加している。

子どもにはこういうものを与えちゃいけないとか、難しすぎるんじゃないとか、日本では考えすぎているように思う。静かに美術を見なくちゃいけないというのもその一つ。

美術なんて楽しければ良いと私は思う。歓声をあげるのもありだし、作品について話し合うのをうるさいというのはお門違いではないかと思う。私自身が、絵の前で学芸員と作品について話していたら来館者から「うるさい」といわれてしまったことがある。静かに見たいという人がいるのも分かっているが。

看士に「静かに」と言われるところが多い。府中市美術館では「なんでも話していいです」としてはどうか。

絵に関することだったら、という注記は必要。私語はだめ。

展示室内の反応をみていると、音に対して過敏な方も一定の割合はいます。これがいいか悪いかということは別問題です。

私たちは子どもたちから出た言葉や、子ども同士で話し合うことはとてもいいことだと思いますし、それを推薦しています。しかし、一方でそういった状況がありますので、我々の美術鑑賞教室では、作品をみるだけではなく、美術館での過ごし方、ルール・マナーというものを教える事も必要だと考えております。府中市美術館の鑑賞教室では良くて、将来彼らが他の展覧会や、他の美術館に行ったときに指摘されるかもしれないからです。ただし、そのために鑑賞教室で萎縮させてしまっては逆効果だとも思いますので、その按配は難しいところです。

掲示やHPで、この日は小学生の美術鑑賞教室が実施されているという情報公開をしていけば、批判的な人だけでなく、逆に子ども達がどのように鑑賞しているのだろうと興味を持った人が見に来てくれるかもしれない。そういう意味では美術館のもう一つの楽しみ方、というのはできないだろうか。

ぱれたんの展覧会は、ここに来ると何か作れる、というお楽しみがあって来ている人も多いと思う。

ローランサン展でもロビーでワークショップをやってもらえれば、大人向けの一般的な鑑賞をしながらも、最後に子ども達が「やっぱりここで何か作れるんだ」という振り返りができるものがあると、お得感があってよいと思う。もちろん大人にも楽しんでもらえると思う。

企画展のテーマについて

この前の武蔵府中・炎の油画家5人展のような展覧会はこれまでなかったように思う。今後は在住・ゆかり作家のテーマで年1本くらい企画していく予定なのか。

当館は市立美術館ですから、ゆかりの作家について検証するのはひとつの使命だと考えております。

実際にこれまでいくつか企画しておりますが、数年に一回という開催ペースで、なかなか継続的には難しい状況です。集客が振るわないというこれまでの結果があるため、なかなか実施が困難な状況にあります。「5人展」という形で本年度実施できましたので、可能であれば数年のうちに「武蔵府中の日本画家」「武蔵府中の彫刻家」などといった形で、地域ゆかりの作家を紹介していきたいと考えております。作品調査などには市民の方のご協力も必要ですので、協働事業として進めていければと思っております。

具体的になるが、川越に相原求一朗という作家がいる。府中には牛島憲之がいるが、川越とそっくり作品をとりかえて同時期に展覧会を開催することはできないだろうか。牛島作品を川越でみせたい、という思いがある。

本年3月から5月にかけて尾道市美術館で『牛島憲之展 府中市美術館コレクション』を開催していただきましたが、これは尾道市美術館と当館で所蔵作品の交換展はできないかというのが発端でした。所蔵作品の交換展については、かかる経費も少なく、また珍しい作品も展示できるのではないかと思います。

武蔵府中・炎の油画家5人展での鑑賞教室を見た。

美術館としてみせたいものはたくさんあると思うが、入って右側に壁をつくってしまったために、子どもたちがぐるっと回るときに作品が見えなくなってしまっていた。あの壁が無ければ、大きな絵をもっと引いた位置からゆったり見えたのにとすると残念。数が多いのも良いが、日常とは違う世界があるのだという期待感をもって展示室に入場した時、もう少しゆったりとみせるような工夫が必要ではないかと思う。子どもたちが床の真ん中に座って、皆で見られたらよいのに、勿体無いと感じた。

(3) その他

美術館外のベンチについては修繕しないのか。

順次修繕しております。